

〔干祿字書^{上聲}〕寢^寢下正、〔同去聲〕寐^寐上俗、中

〔釋名^三〕寢^寢也、靜謐無聲也、

寢權假臥之名也、寢侵也、侵損事功也、

〔倭訓栞^{前編二十二}〕ね^{〇中} 寢をよむはぬと通ず、宿も同じ、^{〇中}

ねる 寢ぬをねるともいへり、寐も同じ、

〔日本靈異記^中〕極窮女於尺迦丈六佛願福分示奇表以現得大福緣第廿八^{〇中}

寐^子 寢^上如

〔日本靈異記^上〕捉雷緣第一

天皇^{〇雄} 盤余宮之時、天皇與后寐大安殿^{〇中}

寐^禰氏

〔八雲御抄^{三下}〕寐 たび かり ひとり たち うた、 ひる まる おびとかぬたびねと

いへり

〔倭訓栞^{中編二十五}〕みねます 古事記に、御寢坐をよめり、今御寢なるといへり、

〔古事記^中〕垂仁故天皇不知其之謀而枕其后之御膝、爲御寢坐也、

〔古事記^{下中}〕履本坐難波宮之時、坐大嘗而爲豐明之時、於大御酒宇良宜而大御寢也、

〔日本書紀^{神代一}〕一書曰^{〇中} 時伊弉册尊曰、吾夫君尊何來之晚也、吾已滄泉之寵矣、雖然吾當寢息、請

勿視之、

〔古事記^{神武}〕後其伊須氣余理比賣^{〇神} 參入宮内之時、天皇御歌曰、阿斯波良能志祁去岐袁夜邇須

賀多多美伊夜佐夜斯岐氏和賀布多理泥斯、

〔源氏物語^{二木}〕まろうどはね給ぬるか、いかにちか、らんとおもひつるを、されどけどをかりけ